パドックに付帯する施設(事例)

パドックに付帯する施設には、さまざまな工夫が見られます。ここでは、主な事例を紹介します。

給餌施設

牧草の給餌施設の工夫

縦の柵を2重にすることにより、牛が引っ張り出して下に落とす量が激減する。

給餌通路の工夫

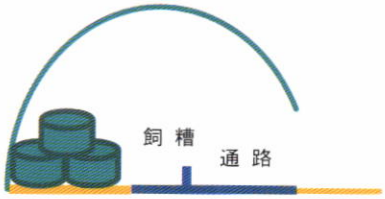
パドックの仕切部分を給餌通路にしている。給餌通路が十分確保できない場合は、この方法が良い。

給餌施設の有効利用

右側は、未経産のフリーストール施設で、左が育成用のパドック。

古いD型の乾草舎を再利用

片側を解放し、飼槽と給餌通路として利用している。



給水施設

パドックに面した牛舎の壁にウォータカップを設置。壁の防腐処理と、汚泥対策が必要

給餌施設

育成牛のサイズに合わせ、飼槽の位置を調整することが必要。飼槽の底を育成牛の肢節と同じ高さにすると良い。雨水の除去用に排水口が必要。

避難施設

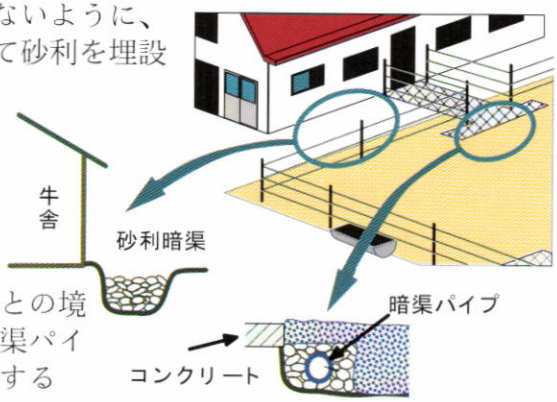
降雨や日照から牛が避難する小屋

写真の施設は、コンクリートのパドックに設置されており、柱にキャスターを取り付けることができるため、一人で簡単に移動できる。

排水対策

パドックに傾斜がない場合は、表面排水を促すため、中央部を高く盛り上げると良い。

牛舎の屋根から落ちる雨水が、パドックに侵入しないように、軒下に側溝を設けて砂利を埋設する方法が効果的。



コンクリートとの境界は、砂利や暗渠パイプを使って排水する

パドックの外側に排水溝を設置

パドックがコンクリートなら写真のようなタイプが良。火山灰の場合は、道路の側溝のようなものを設置するか、パドックの面を高めにする。

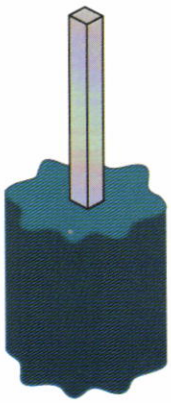
牛舎とパドックの仕切にU字溝を設置

この中を無孔タイプの暗渠パイプが通っている。パドックの側溝で回収した汚水がここを通って尿溜に接続されている。

パドックの分離

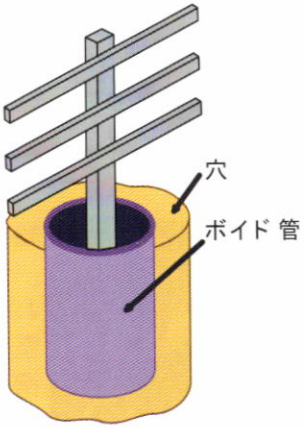
古タイヤを利用して、支柱を作成

電牧の支柱として単独使用したり、写真中央のようにフェンスとして組合せて使用できる。



パドックの自力施工

パドックのフェンスを自分で組み立てる場合、支柱の基礎コンクリートの重量が100kgを越えるため、設置が難しい。基礎コンクリートの型枠としてボイド管を利用し、すべてフェンスを組んでからコンクリートを流し込むことにより、自力施工が可能になる。



支柱の台

プラスチックの波トタンを巻いて型枠とし、コンクリートを流し込み作成。トタンの山谷を合わせ、ひもで縛ると、枠としてしっかり固定できる。枠にしたトタンは再利用可能。重量があるので安定している。

パドックは、牛が快適に居住できるように、採食飲水など自由な行動ができるスペースと施設が必要です。バーンは乾燥し、雨風から身を守れることも大切です。また、管理者にとっては、除糞や給餌、牛の移動、個体管理などの作業が容易であることが求められます。

写真1は、牛舎裏の傾斜地の林地をパドックとして利用しています。排水、防風雨に勝れており、静寂な林地は離乳直後の育成牛にとって非常にリラックスできる空間となっています。

パドックは農村景観としても重要な働きをします。パドックのなかに植林したり、もとからあった木を残して牧場のシンボルにしているところがあります。木は牧柵で牛から守られており、日影と防風の効果をもたらします。パドック整備は、牧場全体の整備計画のなかでは常に後回しになりますが、創意工夫と手作りで安価に仕上げることができるので、管理者にも安らぎを得られるような場として整備して欲しいものです。